

平成12年(2000年)10月23日(月曜日)

世界日報

Viewpoint

「今世紀中」との予測が的中

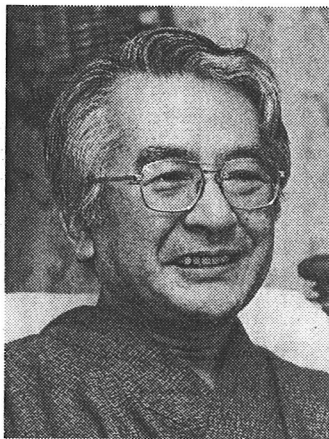
四年前に出した拙著『世界現代史入門』(九六年八月、サイマル出版会)の中で、筆者は「釜山から新義州までの半島縦断鉄道も、再び全通することになるかもしれない。私はその時期は導くとも今世紀中にやってくるものと想定している」と書いた(同書二八ページ)。六月に訪朝した金大中韓国大統領と金正日朝鮮労働党総書記の南北首脳会談の結果、この予測はどのような中ずることになったようである。

もちろん、軍事境界線を挟んで南北約四十キロの旧線路脇に埋められた無数の地雷の除去や線路の再敷設などの作業に手間がかかるため、実際の開通は早くとも来年になるだろうが、すでに南北で軍隊を動員した地雷除去作業が開始されている以上、汶山(韓国側)の線路断絶地点に掲げられたフクロに大書された「鉄馬は翔びたい」という北への鉄路再開の夢は早速実現するだろう。

実を言うと、南北から何度の軍事境界線を訪れて、筆者が何よりも分断の悲劇を実感したのは板門店でも統一展望台でもなく、汶山の鉄路断絶地点と臨津江にかかる破壊された

金大中氏ノーベル賞受賞に寄せて

千葉商科大学教授 高橋 正

京義線復旧にふくらむ夢
日本の援助で関釜トンネルを

て無残にも断ち切られてしまった戦後史への悔愧の念でもあった。戦前の日本には、意図はともかく、関釜トンネルを掘って(日本)列島と(朝鮮)半島と(アジア)大陸を鉄道でつなげようという雄大な構想があり、戦争の激化で一場の夢に終わってしまったものの、それから六十年を経て、今回の両金会談の結果決まりとなった京義線の復旧は少年の日、心ある大人から聞かされたこの壮大な夢を筆者に蘇らせてくれたのである。

東アジアの平和と繁栄へ
そう思っているところへ、金大中大統領から関釜トンネル構想復活への示唆があった。金大中という人は真に端倪(たんげい)すべからざる男である。日本の敗戦から六一年の

国の民主化をリードした東アジアの人権擁護に寄与し、北への「太陽政策」を自ら実行して平壤を訪問、南北の緊張緩和と関係改善を図り、韓憎悪の輪を断ち切った。

とりわけ、筆者は④の貢献を多とする。「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」という諺通り、雪中に西を輝かす「忍冬(すいこうすい)」のあた名そのままに、苦勞人のこの老人は自ら平壤を訪れて年下の金総書記に、もっぱら花を持たせたのと引き換えに、この「謎の人物」を自らの下にさらけ出して見せた。世界の世論は意外に人間的な総書記の素顔を発見し、韓国世論や日本のマスコミには「正日人気」すら巻き起こったが、冷静に見れば、これまで、限られた情報のために抱かれていた一方的なイメージが是正され、一国の指導者

たる者、奇矯で非情なだけでなく、人間的な魅力なしには務まるものではないことがここでも証明されただけで、韓国世論のよに従来の経緯も忘れて彼を持ち上げるのも、彼地の民族性とはいえあまりに情動的で少々大人げないが、これにはわれわれ日本人も大いに自戒すべきである。

さすがに米国人は冷静で、「金氏朝鮮」をいよいよ交渉可能な相手とみて、十月、総書記の親書を携えた趙明福国防委員会第一副委員長を訪米を受け入れ、朝鮮戦争以来の敵対関係に終止符を打ち、ともに、オルブライト國務長官、クリントン大統領が近い将来訪朝する旨の意図を曲げず、その方法については商人のように現実的に立脚した柔軟性を持っていくことだ。真に「憎い男」である。

の「拉致疑惑」や過去の「植民地支配」の問題があることは言うまでもないが、前者を腹に収め、後者を率直にわびる腹を持ち、援助米五十万トンを引きつけて平壤行きを先方に申し入れる文字通り「太っ腹」な政治指導者の出番が来ているのである。外交交渉は結局のところ、外交官任せでなく政治家の決断が不可欠だ。その際、日本の全面的財政・技術援助による関釜海底トンネル掘削計画と、ソウルから平壤を経て瀋陽に至る新幹線敷設計画を提議してはどうか。すべてが東アジアにおける冷戦後の平和と繁栄をにらんだ気宇壮大な構想であり、実現可能な計画である。

「原則曲げず方法は柔軟に」
金大中氏のノーベル賞受賞をめぐっては、こんな裏話がある。中東和平が実現していれば、平和賞はクリントン大統領に行かず、最近のバレスチン騒動でおしや

んになり、急ぎよ、金大中氏にお鉢が回ってきた。金正日氏との共同授賞も検討されたが、異論があり、代わりの緒方貞子国連難民高等弁務官にという案も出たという。金正日氏は過去の「実績」がじゃまをして、結局、金大中氏単独授賞に決まったのは、この人の実績と幸運のたまものと言はかない。

しかし、金大中氏は自伝「新しき出発のために」の中でこんなことを言っている。「正しい政治家になろうとするなら、書生的問題意識と商人の現実感覚の両方を持たなければならぬ。原則については書生的に意思を曲げず、その方法については商人のように現実的に立脚した柔軟性を持っていくことだ。真に「憎い男」である。